

一四歳、中二を生きる

吉川中学校 二年 西谷 真穂

わたしは今年中学二年に進級し、五月に一四歳になりました。誕生日を祝ってもらうときに、「両親が、「いよいよ一四歳、中二か！」と感慨深げに言っていたのを覚えています。この「一四歳、中二」は、両親にはとても特別なイメージのようでした。聞いてみると、二十五年前に、一四歳の男子中学生が考えられないような残酷な事件を起こしたそうですし、「中二病」というような言葉（中学二年頃の思春期に見られる背伸びしがちな言動や自己愛に満ちた空想や思考をやゆしたネットスラング）もあるそうです。インターネットで「一四歳」と検索してみたら、本や漫画などの作品もたくさん出てきました。わたしにとっては、中学に入学した中一の方がよほど人生の節目なのに、なぜそんなに一四歳が特別なのかと思って、図書館のサイトで検索し、出てきた本をいくつか借りて読んでみることにしました。

色々な本がありました。どうしようもなく不安定な想いを抱えて自分の部屋から出てこない少年が、最後には自分の意志で部屋を出る話や、「一四歳のあなたは今不安ですか、この生きづらい社会で自分らしくどう生きますか」というようなエッセイ風のもの。正直わたしには共感しきれないものでした。また、読まなかったですが、「一四歳の母」という衝撃的なタイトルもありました。

その中で一番共感できたのが、今回選んだ本です。この本は短い話を時間割に見立ててあり、国語、家庭科、数学、道徳、昼

休み、体育二時間の、七時間目までになっています。正直ちょっとしんどそうな時間割です。色々な「教科」からめて、悩みや友情、家族のことや死についても描かれていて、興味深く読みました。なりたいたい自分になれずに自分の殻に閉じこもってしまふ子、外見にこだわる女の子、苦手なマラソンに、祖父が少しでも長生きするように願掛けして挑戦する子もいました。歳を取って最期を迎えるのは当たり前と分かっていても、自分の大切な人には簡単にあてはめられない気持ちによく分かりました。どの主人公も、「勉強しても良い点取れない！」とか、「マラソンが嫌すぎる！」など、明日学校に行ったらこの子が隣にいるのではと思うほど身近に感じました。そして全ての話に共通して出てくる優等生キーマンがいるのですが、そんなに出しゃばらないのにみんなに道を示す存在になっています。その彼も含めて、全員が自分のゆずれないことを持って精一杯生きていく、という感じがしました。

わたしにもゆずれないことはあります。文房具はお気に入りがあるし、前髪の長さや靴下の長さは、たった数ミリ数センチですが、自分の思うようにしたいです。暑い夏でも制服のスカートの下に体操ズボンをはくのも、その一つかもしれません。

最後に「放課後」として先生の話が出てきます。先生は立派な大学を出て教師になった「立派な大人」ですが、子どもの時の夢がかなっていないと焦って夢を追っています。でも、それは先生が大人になるうちに夢の方向を見間違えてしまっていただけで、実は夢はかなっている、そしてこれから先生が止まらなければ夢はかない続ける、とわたしは理解しました。大人

になると楽しいこともあるけれど、その分悲しいことや挫折もあるのだと思います。そうしているうちに、子どもの時の気持ちを忘れそうになる。たまには立ち止まって振り返ってみよう。それは確かに学校の教科では学ぶことのできない「放課後」の勉強だと思いました。

わたしの「一四歳、中二」は、コロナの影響で残念な部分もありますが、それなりに充実しています。今は部活が中心になっていて、今年はチーム一丸となって目標を達成できました。また、新チームでのこれからの目標も立っています。学校では勉強は大変ですが、友だちがいて楽しいし、家に帰れば自分の好きなことに夢中になっています。自分のゆずれないことを両親に分かってもらえず、イライラしたりもしています。

世間やネットの中での「一四歳、中二」と比べて、平和なのだろうなあとも思います。でも、同じくらいの年の人が命を落としてしまう、つらいニュースを目にすることがあるのも事実です。やりきれない想いを抱えて苦しんでいたりと、傷ついたり傷つけてしまったりしている「一四歳、中二」がどこかにいる。それは他人ごとではありません。みんな精一杯、自分の今この時を生きているからいろんな「一四歳、中二」がいて、その全てが、リアルな「一四歳、中二」なのだと思います。友だちや家族、まわりの人と一緒に今この時を、「明日の時間割」を生きて。わたしは自分の「一四歳、中二」を精一杯過ごしていきたいです。